

障害のある人が 特別な存在でなくなる 21世紀を見据えてユニバーサルな 地域社会をつくります。

橋本大二郎氏

高知県知事

聞き手 梶本久夫 本誌編集・発行人

高知県は昨年、高知市及び高知県政策総合研究所と共催で、「高知県のユニバーサルデザイン」と題した国際シンポジウムを開催した。橋本知事はパネラーの1人としてシンポジウムに参加し、ユニバーサルデザインの造詣は深い。県では今年度から、森林公園や道路のユニバーサル化に着手しており、今後県政のさまざまな領域にユニバーサルデザインの考え方が盛り込まれる見込み。

生活者の目線で道路整備を行う

昨年、「高知県のユニバーサルデザイン」と題して、国際シンポジウムが行われましたが、その感想をお聞かせください。

橋本―私もパネリストの1人として壇上にいたわけですが、聴衆の方々は福祉の専門家ばかりというわけではなくて、これといった色合いを感じない。その時、「ユニバーサルデザインはものになるテーマだ」と直感しました。ユニバーサルデザインの考え方をどのように具体的な事業につなげていくかが今後の課題です。

「たまごの割れない道づくり」は、そのプロセスも含めてある程度ユニバーサルデザインが実現されていると思うのですが。

橋本―あの事業は最初からユニバーサルデザインを意識していたわけではありません。県には職員の提案を事業化してゆく職員提案制度が設けられており、その中で

幸い、結果としてユニバーサルなものが出て来たということでしょう。

「たまごの割れない道づくり」は、技術職員が男ばかりなので、女性の意見を盛り込んでいかなければならないという発想から始まった事業です。通常、女性参加というと、文化や福祉の領域がほとんどですが、女性とあまり縁がないと見られている道路などの土木事業の分野で、最初から女性関わったらどのようなものかという実験でした。

いろいろな女性に集まってもらい話し合いをすることで、生活者の目線による道路づくりができたと思います。自転車の買物かごにたまごを入れて走っていると、買ったばかりのたまごが割れてしまったので、たまごの割れない道をつくりたい。そんな日常の話し合いの中から、「たまごの割れない道」という名称は生まれました。生活の利便性から出発して、結果的に子どもやお年寄りを含めて、誰もが使いやすい道ができたと思います。

こうというのは、高知県が全国で初めてです。そうであれば、「県民の森」のユニバーサルデザイン化を全国に呼び掛けていってはいかがでしょうか。

橋本―先ほどの河川も森林も、最初は障害のある人をイメージして、提案が出されたと思います。しかし、これからの超高齢社会では、5〜6割の方が目や足などに何らかの障害をもつようになりますから、障害のある人が特別な存在でなくなる。であれば、ユニバーサルデザインの視点で今からさまざまな領域で整備を進めていくことで、誰もが暮らしやすい社会ができあがるのではないのでしょうか。

森林公園がソフトとして情報発信するのに値するのであれば、他県とのネットワーク化も視野に入れて、全国に発信していくのもいいと思います。

生涯コストの発想が重要

ユニバーサルなものに、エコロジーにも配慮したという部分加われば、さらにユニバーサルデザインの底辺も広がりますね。

橋本―高知は高度経済成長期に乗り遅れたために重厚長大産業はもろんですが、組立加工型の工場もありでできなかった。そのぶん、公害が少なく、手つかずの自然が残っており、工業化による負荷をそれほど背負わなかった面があります。

四万十川のようなきれいな川もあるし、そのブランドをもとにいろいろな新しい仕組みをつくり、それを他に波及させていくということで、県の行政組織内に「四万十川対策室」を設けています。さらに現在は、流域の市町村と一緒にやっていけるように「四万十川条例」を策定中。この条例には、周辺を開発するときの規制の



はしもと だいじろう●1947年生まれ。慶応義塾大学法学部卒業。1972年、日本放送協会入局。報道局科学文化部次長等を歴任。1991年高知県知事就任、現在3期目

女性のつくった道というのでもっとカラフルな道を想像していましたが、スッキリしている道ですね。

橋本―歩道と車道の段差を解消しているからです。歩道と車道の区切りは、段差をつけなくても、鎖などのガードがあればよい。その結果、みんなが歩きやすく、なおかつ、段差がないがゆえに視覚的にも道自体が広がって見えるようになり、景観まで変わることを実感しました。

車イスで森林浴ができる公園

森林公園をユニバーサルデザインの視点で整備しようという構想があるそうですが。

橋本―高知は森林も多いですが、四万十川をはじめとして美しい河川もいっぱいある。2年ほど前に、車イスで駐車場から河川敷まで下りていってそのまま鮎釣りができるようにしてはというアイデアが出て、これは面白いということでも事業化しました。

森林公園の中に車イスでも憩えるような場所をという提案が出て来て、これは河川の続きだなと受け止めました。森林公園は植樹祭を行った公園で、見晴らしもいい。誰もが森林浴ができるようになれば素晴らしいことです。

植樹祭の跡地は「県民の森」と呼ばれて全国にあります。その森をユニバーサルデザイン化させてい



国際シンポジウムの内容をまとめたレポート

部分まで盛り込んでいく方向です。

その関連でしょうか、知事の言葉の中に「生涯コスト」というのがあります。これは、どのようなものですか。

橋本「社会的な長期コストをどのように下げるか」ということですが、考え始めたきっかけは森林の問題です。中山間地域の木を管理する人は、これからどんどん減ってきます。そうすると、維持管理ができなくなると、山の保水力が落ちる。

大雨が降れば、増水して下流に被害が出るので、ダムや堰をつくるなど大きなコストがかかります。いつぼう、雨が降らないといつべんに水不足が発生して、海水を飲料水にするためのプラントをつくらなければならぬ。そうであれば、今は無駄に見えても森林資源を維持していくために投資をしていくことが、長いスパンで見ると社会の経費を下げっていくことになる。

ごみの問題でいえば、間伐材でトレーをつくる技術があります。プラスチックに比べてコスト高だが、分別やその後の処理コストを「生涯コスト」で考えればどちらが得か、という議論もある。そのコストを誰がどのようにかぶるかという議論を、生産者だけではなくて流通関係者、そして消費者が参加して全体として考えていかないと、社会の仕組みは変わらないでしょう。生涯コストも変わらない。それができるかどうか、大きなポイントです。

地域の文化や環境を産業につなげていく

ユニバーサルデザインが「人間振興」のようにいわれることもありますが、「産業振興」にも役立つという力はない。

橋本「文化、環境の場合でも同じです。文化、環境とい



全国で2番目に高齢化率が高い高知県を、強いリーダーシップで引っ張っている

うものは従来、行政の中では優先順位が低く、お金が余ったらやるという位置づけでした。また、「環境保護」「文化財保護」のように、「守る」ということがクローズアップされてきました。守ることはもちろん必要ですが、文化や環境をテーマとして産業につなげていく、攻めの姿勢はもっと重要です。

環境や文化を利用した産業起こしが求められており、観光振興課を商工労働部ではなく、文化環境部に置いているのもそういう意味合いからです。観光は文化を売っているのですから。

環境の話でいえば、高知工科大学のカリキュラムはユニークですね。

橋本「これからは、公害を出さないとか、後追的な環境対策ではなく、最初から環境に負荷をかけない材料、それをつくる技術・仕組みなどが問われてくると思います。そういうことを、高知工科大学の物質・環境システム工学科ではめざしています。そのために、地球の成り立ち、動植物の誕生過程などについて学ぼうと

が求められます。県内のNPOなどの動きはいかがですか。

橋本「高知市の浦戸湾は五台山から見ると実にきれいな湾ですが、過去に台風による高潮被害が出たために災害対策としての防波堤が視界を塞いでいます。防災面から、「何十年かに一度災害が起きたらこの防波堤は役立ちますよ」ということをいかにきちんと説明できたとしても、「では残りの何十年をどうするのか」ということへの技術者・行政からのメッセージがなければ、なかなか理解してもらえない時代です。

「高知NPO」という団体が親水空間として浦戸湾の見直しを提案しています。しかし沿岸住民の方は災害で大きな被害を受けたので、防波堤の高さを下げるということには理解が得られない。

災害から4半世紀を経て、いざというときに対応できる技術が生まれています。防波堤を下げて大丈夫だということ、「たまごの割れない道」のように、わか

いう学科ですね。

今後はさまざまな分野で、治療的なものより、予防的なものが求められるようになるでしょう。そういう意味では、例えば、ごみをはじめとする環境問題についても、子どものうちから環境を大事にするのは当たり前だという意識をもってもらうために、エコ教育が大事になります。ユニバーサルデザインについても同じことがいえますね。それが生涯コストを下げることに繋がります。

アジアの研究者を招いてセミナーを開催するなど、海外との交流も積極的に進めていますね。

橋本「バリアフリーはハードの面の障壁を取り除くことの意味合いが強かったですが、ユニバーサルデザインは初めからハードだけではなくソフトの面も含んでいます。年齢、性別、国籍などに関係なく、同じフィールドの上でみんなが一緒にやっていく仕組みをつくるのが広い意味でのユニバーサルデザインでしょう。誰もが使えるデザインはイコール障害をもつ人のためにもなるというユニバーサルデザインの考え方は、国際化や男女共同参画など、すべての分野で使える理念でありテーマなのではないでしょうか。

高齢者が自由に活動できる社会を

高知県市病院の設立計画の根底にも、ユニバーサルな発想があるのですか。

橋本「統合については社会的な事情から決定したものです。病院ができることが決まって、どのような部分にユニバーサルデザインを活かしているかということ、これから考えていかなければなりません。

医療の分野では、病気になる前に検査をして予防しようという「一次予防」、さらに日常生活の中から病りやすいシミュレーションを使って、住民の方々に理解してもらおう方法はあるのかもしれない。

NPOをはじめとする市民団体の役割が今後ますます重要になりますね。

橋本「市民の側から見れば、行政は天下り先として外郭団体をつくって、コンサルティングや土木事業もそこでやっているのではないかという思いがあります。しかし実際にものをつくっていくときの実施設計やコンサルティングには技術や専門性がある。実施設計、基本設計にながっていくようなコンサルティングをするグループが、市民の側にも必要だと思えます。そういう技術を身につけられるかどうかでNPOが成り立っていくのかどうかが決まるような気がします。

実績がないNPOにも、成果目標をきちんと提示して予算をつけていく思い切りが、行政の側に必要でしょう。目標を達成できない場合は翌年度から予算をつけない。そういうことで、NPOが育っていくのではないのでしょうか。



「たまごの割れない道」を調査する女性8人の検討会メンバー



ユニバーサルデザインのシンポジウムではパネリストとして



ユニバーサルデザインのシンポジウムの会場風景



「四万十川シンポジウム」に集まった五県の知事。写真左から北川(三重)、浅野(宮城)、橋本(高知)、増田(岩手)、寺田(秋田)の各知事